

■（１８７）復興工事の進展と被災者の気持ちの変化

震災４年を前に、新聞やテレビの記者が被災地に入っている。３月１１日に向けて被災者のいま、を伝えるためだ。半年ぶりに三陸に来た同僚は、被災した市街地や住宅地の風景の変化に驚いていた。「こんな小さな町でこんな大規模な工事をしているとは…」

震災から１年、２年、３年、と同じ人たちに継続して取材している。今回が４回目となる。被災者の生活は戻っているのか。気持ちはどうか、など時間とともにどう変化しているかが見えてくる。「病気で手術した」と笑顔で報告してくれる女性がいた。これからのまちづくりを熱く語ってくれる男性もいる。一方で、まだまだ気持ちが前向きになれない人も少なくない。気持ちの「復興」は実にさまざまで、大型の重機で道路や防潮堤を造り、ダンプカーでかさ上げ用の土砂を浸水地に運び込む土木工事のようにはいかない。機械ではなく、支援する人たちが被災者宅を回って心や体のケアを今も続けている。

かさ上げ工事が本格化した被災地で、家族を失った男性の言葉にはっとさせられた。「行方不明者の手がかりももう捜せない」。復興の進展をつらく感じる人もいる。（山）